



ヒーロー

土曜日。朝からアルバイトに向かう。腕時計を見て焦る。

いかんいかん。急がねば。今日の現場はちと遠いのだ。

老人ホームでボケてんだかボケてないんだか分からないじいさんばあさん相手に手品を見せるなんて。

まったく、しけた営業だが、それもしょうがない。

俺はマジシャンの卵だ。

だが、本当になりたいのは「ヒーロー」だった。

今はいい時代だ。通信教育でもヒーロー講座があるのだから。

まだ卒業資格は得ていないが、既に変身用万年筆は手に入れた。

これは自動車と言えば仮免のようなものだろうか。

変身は河川敷で何度か試してみた。

本物のヒーローになるのは、とても素晴らしい気分だった。

ヒーローになった自分の姿を頭に思い浮かべながら歩いていると、あっという間に駅に着いた。

ホーム真中あたりのベンチに、制服姿の女子高生が座っていた。

人目もはばからず、くわエタバコですらりと伸びた両足を前に投げ出している。

なんということだ。まったく嘆かわしい。

俺は彼女の目の前で立ち止まり、躊躇することもなく言ってやる。

「このメス豚めっ！ 喫煙場所で吸いやがれ！」

女子高生はチッと聞こえよがしに舌打ちすると、俺の足元に火のついたままのタバコを投げ捨てた。

ふんぬうううう、このアマあああああっ！

俺の中の正義感に火が点いた。

このようなピッチには、もはや鉄拳制裁しかなかろう。

だが勢い込んだ俺が拳を握り込むとほぼ同時に、各駅停車がホームに滑り込んでくる。

女子高生はこちらを振り返りもせずに、さっさと車両に乗り込んでゆく。

あっさりと梯子を外され、行き場を失った俺の怒り。

俺は目の前を通り過ぎる各駅停車を見送りながらホームに立ち尽くす。

気を鎮めろ。これぐらいでカッカしててどうする。

そんな怒りっぽい性格では、到底、立派なヒーローにはなれない。

俺は心の中で叫ぶ。

ヒーロー心得、其の一！ ヒーローたる者、常に沈着冷静であるべしっ！

足下でくすぶる吸殻をぐりぐりと踏み消し、拾い上げる。

俺はホームの端へと向かい、怒りの燃えカスと共にそいつを灰皿へ投下する。

目を瞑り、腕組みしながら急行列車を待つ。

きゃっという叫び声でしたので顔を上げる。

危ないっ！

先ほどから大声でふざけ合っていた子供グループのうちの一人が、ゆっくりと傾くように線路へ落ちてゆく。

なんと、これはチャンスだ。

ヒーロー心得、其の二っ！

ヒーローたる者、市民を守る為には自ら進んで犠牲になるべしっ！

このような人込みでは、さすがに変身することはできない。危険すぎる。

だが、心配には及ばない。

こんなこともあるかと。俺は昔からイメトレをしていたのだ。

人が線路に落ちた時には、すかさず飛び降りて救出する。

そして、翌日の新聞の一面には「ヒーロー現る！」と大きな見出しが躍る。

ふっふっふ。

さあ、いざ、行かん。

ところが、足がすくんで動けない。

まるでホームに張り付いてしまったようだ。

あれほどイメトレをしたのに！

線路の彼方から急行列車の先頭車両が近付いてくる。

「誰か、緊急停止ボタンを！」

ホームのそこら中で叫び声上がる。

俺が歯を食いしばって足を動かそうとしていると、真横にいたデブの男がリュックを投げ捨てて線路に飛び降りた。

しまった！ 先を越されたじゃないか！

しかし、キミ、大丈夫なのか？ その巨体で。

ほら。言わんこっちゃない。

俺は目を覆う。

再び目を開くと、着地の際に足を挫いたデブは、泣き叫ぶ少年の横で無様に転がっていた。

荒々しい警笛が耳に突き刺さる。

金属を切り裂くようなブレーキ音が空気を激しく震わせる。

急行列車の姿は次第に大きくなってゆく。

やっとのことで金縛り状態から抜け出した俺は、すぐにホームを蹴り飛ばした。

両手を翼のように広げ、ふわりと線路に舞い降りる。

まずは少年を抱え上げ、隣の線路に放り投げた。

お次はこのおデブちゃんだ。

ヤツは胡坐をかいたような体勢で足首を押さえている。

Tシャツの襟元を掴み、そのまま引きずろうとしたが、生地がびよーんと伸びるだけで、デブの巨体はびくともしない。

ふんぬ！

ダメだ。

ふんぬ！

やはり動かない。

迫る轟音。頭上から聞こえる悲鳴。

まずい。絶体絶命だ。

しょうがない。変身するか。

でやっ。

懐から変身用の万年筆を取り出す。

万年筆の代わりに、万国旗がびろびろと出てくる。

おっと。間違えた。これじゃない。

こっちだ。

でやっ。

白いハトが数羽。バサバサと飛び立ってゆく。

いかん。また間違えた。

こんどこそは。

でやっ。

俺が天にかざしたのは、ただのボールペンだった。

今朝、焦って家を飛び出した為、間違えてしまったのだろう。

ううむ……。立ち尽くす俺。転がったままのデブ。

結局。列車は俺とデブの目前で停止した。

ホームの上では割れんばかりの拍手が沸き起こっていた。

俺の勇気に対してではなく、緊急停止ボタンを押したサラリーマンに対してだ。

俺は今日もヒーローになりそこねた。

現場には遅刻するし、手品のタネは壊してしまう。

もう踏んだり蹴ったりだ。

老人ホームでは手品もそこそこに得意のトークで乗り切った。

芸能人と勘違いしたじいさんばあさんには何枚もサインを求められた。

これもある意味ヒーローだろうか？

違うような気もするが、まあいい。

きっとヒーロー道とは長く険しいものなのだ。

初仕事

せっかく。

せっかくヒーローとして死ぬと思ったのに――

変なヤツに邪魔をされた。

僕が死のうと思って駅のホームで電車を待っていると、たまたま、ふざけていた子供が目の前で線路に落ちた。

予想外のアクシデントだったがチャンスだと思った。

ここで僕が飛び降りれば、自殺だとは思われない。

「きっと子供を助けようと思って、彼は――」

そんな美談になるはずだった。

それなのに、アイツは邪魔をした。

僕の後を追うように、線路へ飛び降りたのだ。

アイツは転んだ僕を追い越し、俊敏な動きでまず子供を救うと、次に僕を助け出そうとした。

だが、本気で足を挫いていた(本当は足を挫いたフリをするつもりだった)僕を、動かすことは出来なかった。

電車はどんどん迫ってきた。

その時だ。

何を思ったかアイツは上着のポケットから、万国旗や数羽のハトを次々に取り出したんだ。

いったい。あれは、どういうつもりだったのだろう。

結局。電車は急ブレーキをかけて止まり、僕らは助かった。

僕とアイツは首根っこをつままれた猫のような体で駅長室に連れてゆかれた。

「困りますね。線路に飛び降りられては」

「違うんだ、ちょっと待ってくれ――」

ヤツは反論しようとするが、鉄道警察の男に遮られる。

「いいですか。一步間違えば、三人とも犠牲になっていたのですよ」

「でも、俺たちが助けに行かなきゃ、あの子供は」

「非常停止ボタンというものがあります」

男は人差し指を立て、赤子を諭すように言う。

「結局それであなたたちも助かったのですよ。今後、あのような危険な真似は慎んでくださいね」

「……はい」

ヤツは不承不承返事をする。

僕らは住所氏名などを控えられ、やっと解放された。

「おい、お前のせいだぞ。あの子供だけなら楽勝だったのに。ほんとなら今頃、俺はヒーローになってたんだ」

「な、何言ってるんだ。僕一人動かせなかったくせに。何がヒーローだよ」

僕は腹立たしかった。文句を言いたいのはこっちの方だ。

「ちょ、お前何キロあんだよ。普通にムリだつづの」

「98キロだよ」

ついサバを読んでしまった。実際には112キロだ。

ヤツは数字を聞いて、目をクルクルと回している。

「そいつはお手上げた。まあいいや。あー腹減ったな。関取、なんか食って帰ろうぜ」

「だ、誰が関取だ！」

え？

僕の思考にブレーキがかかる。

今なんて言った？

「ささ、突っ立ってないでさ。メシ食いに行こうぜ。戦友みたいなもんだろ俺たち」

「う、うん」

動揺した。

ずっと、友達がいなかったからだ。いや。ネットの世界には数人いる。

だが彼らと会ったことは一度も無かった。おそらく今後も会うことはないだろう。

しみつたれた自分の人生を振り返ってみる。

ゴハンに行こうだなんて友達から誘われたことは一度もなかった。

僕は戸惑いながらも、ヤツに背中を押されるままになっていた。

ヤツは調子に乗って「突っ張り突っ張り」「送り出しー」などと言ってふざけている。

「なあ。何食う？」

「うーん、マックとかケンタ？」

「なんだよ、でけえ図体のくせしてちっちゃなあ。もっと豪勢に行こうぜ」

そう言って、ヤツが勢いよく入っていったのは餃子の王将だった。

たしかに名前は豪勢だ。いや豪勢か？

とにかく餃子で有名な店だ。それは分かる。

「こ、ここかい？」

「なんだそのしけた顔は。金ならいって。今日は奢りだ。お前どうせ金がなくて死にたくなっただろ？」

知ってたのか……。

啞然とする。理由はお金ではなかったが、まさか自殺しようとしていたのを気付かれてるとは思わなかった。

「腹いっぱいになりゃ、少しは前向きになれるんだって。これ経験談だから。間違いないぜ」

ヤツはそう言って片目を瞑る。

店に入ると僕は四人掛けのボックス席に案内された。

「よ。横綱、ビール飲むだろ？」

「誰が横綱だ！ それに、まだ昼間じゃないか！」

「バカ。昼間だからいいんだろ。しかも平日のな」

餃子餃子、ニラレバ、ラーメン、キムチにチャーハン、炙りチャーシュー。

あっという間に皿たちがテーブルを占拠する。

「お姉さん、ビールもう1本ね」

ヤツは追加のビールを頼み、赤らんだ顔で僕の方を向く。

ぶっきらぼうだがコイツいいヤツなのかも知れないな。と僕は思い始めていた。

僕がずっと家に引きこもっていると打ち明けたら。存外、親身になって聞いてくれたのだ。

「な。お前も仕事しろよ。なんでもいいんだよ。正社員だとかなんだとか、ややこしく考えるな。なんでもいいんだ」

ヤツは割り箸のお尻でテーブルをトントンと叩きながら語る。

僕はお冷やに入っていた氷を小さくなるまで口の中で転がしていた。

「よし今度、営業がある。その時、お前を助手にしてやる」

「助手？」

「ああ俺はマジシャンだ。マジシャンには助手が必要だ」

ヤツはそこでジャケットの襟を正した。

「言い忘れてたな。俺の名前は轟 空太郎」

空太郎はそう言って、剛毅な名前のわりにほっそりとした右手を差し出した。

☆ ☆ ☆

僕は線路に飛び降りる。

向かってくる電車を豪快に踏み潰す。

ミニチュアの車両が折り重なるように脱線する。

「キャー！」

デパートの屋上に響き渡る子供たちの悲鳴。

「ヤセガマン助けてー！」

「デヤッ！」

舞台の袖から派手に登場するヒーロースーツ。

「トォッ！」

だがドーン。

僕は小手投げで空太郎扮するヤセガマンをブン投げる。

空太郎はよろめきながら立ち上がり、僕に組み付いてくる。

もみ合うふりをしつつ、空太郎はヒーローマスクを僕の耳元に寄せる。

「おい。関取、手加減しろ。お前、自分の役割分かってんのか」

「何がマジシャンだよ」

僕は怪獣の被り物の中で吐き捨てる。

「だーかーらー、なんかの手違いで手品の営業のはずがヒーローショーになっちゃってたって言ってるだろが！ 派遣会社に抗議の電話をかけても、『すまんが頼む』 その一言だぞ！ それっきり留守電だ。バッドウィルめ、まったくなんて会社だ」

頭上で両手をガッチリ組み、おでこをぶつけ合う僕と空太郎。

一見激しいバトルに見せかけて、被り物の中ではひそかに言葉の応酬が繰り広げられていた。

「おい関取」

「関取じゃない。星大地って名前があるんだよ」

「じゃ大地、いいから早く倒れろって」

「ヤセガマン頑張れー！」

子供たちの黄色い声援。というよりは、もはや悲鳴に近かった。

「トオッ！」

「ギャーッ！」

空太郎のモンゴリアンチョップを受け、僕は大げさに崩れ落ちる。

いっせいに子供たちの歓声が上がり、滝のように舞台に降りかかる。

☆ ☆ ☆

「な。働くっていいだろ？」

「まあね。汗もかいたし、少しすっきりしたかも」

「じゃ。メン行くか」

「王将以外でね」

「なんで」

「今日は僕の奢りだ。こないだの借りは返す。だから、今日は僕が店を選ぶ」

こいつは僕を。僕を闇の底から救い上げてくれた。

ひょっとすると本当にヒーロー体質なのかも知れない。

もっとも。

てんで非力。弱っちいヒーローではあるのだが。

デパートの外に出ると、青空が広がっていた。

高い位置に白い雲が二つ。はるか彼方へゆっくりと流れてゆく。

空気は澄んでいた。僕は大きく息を吸い込んだ。

「さ。行くよ、空太郎」

「いてっ、こら、押すなっつうの！」

今なら何が相手でも倒せそうな気がする。

僕らの前に現れる邪魔モノはみんなやっつけてしまえばいい。

そう思うと、僕の尖った唇から、自然に口笛がこぼれた。

披露宴

「またスベったね」

という、ぼくの言葉に空太郎は憤る。

「なにい！？ 手品にスベったとか、そんなのねーんだよ！」

「ウケなかったってことじゃ同じじゃん」

「う……」

空太郎は言葉に詰まる

「こんなじゃヒーローになんてなれっこないって」

「うるせー、今は下積みだ下積み」

ぼくと空太郎は手品の営業で、披露宴会場を訪れていた。

だが、本番では互いの連携ミスもあり、いまいちウケが悪かった。

「むしろ新婦の友達が余興で踊ったパフュームの方がウケてたよね」

「まーたしかに、あれはエロかったな」

エロくはなかったと思うのだが、空太郎にはそう見えたようだ。

おおかたショートパンツから伸びた生脚でも見ていたのだろう。

ぼくらは出番が終わった今も、会場の隅っこで、二人並んでたたずんでいた。

それにしても、手品が終われば、そのあとは式場スタッフとして働けだとか、ありえない条件の仕事を寄越すってところが、さすがにバッドウィルだ。

まあそんな仕事を断りきれないぼくもぼくらなのだが。

「ほら、ぼさっと突っ立ってないで君たち、これこれ」

式場の人間が、ぼくの隣で立ち尽くしていた空太郎に手渡してきたのは、豪華なブーケだった。

「あ、そうだ。リボン付けなきゃ。ちょっとそのまま待ってて」

式場の人間は、リボンを取りに裏手へ戻っていった。

一方、スタンドマイクの前では司会の男が、声を張り上げていた。

「さぁそれでは宴もたけなわ。ブーケトスの時間です。名前を呼ばれた方は、前へ出てきていただけますかー。武藤亜季さん、川井ほのかさんのお二人で一す！」

なんと。

二人だけなのか。

新婦は30前後に見えるから、友人連中もおそらくその世代だろう。

既婚者の方が多いのもたしかに頷けるが。

あんたじゃん。早く行きなよー。

と周りの友人に言われ、押し出されるようにして、一人の女性が前へ進み出てくる。

顔には照れ笑いを浮かべているものの、きっと心中穏やかではないに違いない。

気の毒に。いつ結婚しようがしまいが、本人の自由だろうに。

結婚しちゃったものが勝ち組でしょという価値観が正しいとはぼくにはとても思えない。

幸せのおすそわけ的な上から目線の行為は、ハレの場と言えども、どうにも居心地が悪く感じられた。

「ええと、こちら武藤さんですね。川井さーん、川井さんはいらっしゃいませんか？」

新婦側の友人席から立ち上がった一人が、司会者に歩み寄り耳打ちをする。

なるほど。と司会者は頷く。

「どうやら川井さんは席を外されているようです。やむをえませんので、このまま進めてまいりましょー」

おいおい。一人でもやるのか。

彼女は場の雰囲気を変えないように笑顔を保っていたが、その気丈さがよけいに痛々しく見えた。

「さ。これでオッケー、持って行って」

空太郎は式場の人間から受け取ったブーケをひとにらみすると、ずかずかと大股でそれを新婦の元へ持っていき、そっと手渡した。

「さて、ブーケも届いたようですね。どうです皆さん。キレイでしょう？」

司会者の声を受け、新婦がブーケを頭の上へ持ち上げる。

おおーっと、わざとらしいどよめきのあと、お愛想っぽい拍手が会場に広がる。

「では武藤さん、こちらへどうぞ」

新郎新婦の前へ歩を進める彼女の足どりは、少々ぎこちなく、震えているようにも見える。

「いやー武藤さん、お一人になっちゃいましたねえ」

「は、はい」

唐突にマイクを向けられた彼女は戸惑いを隠しきれていない。

「ちなみに皆さん、今日はブーケトスではなくて、ブーケプルズです。一人一人にリボンを引っ張っていただいて、一本だけがブーケに繋がっているというわけですが—— えー、まあ今回の場合は、引っ張っていただく必要もないですね。なんせ、お一人ですから、ハハハハハ」

司会者の言葉を受け、会場には、まばらな笑いが浮かぶ。

「とはいえ、手渡しするのもなんですからね。さあでは武藤さん、このリボンを持ってください」

一本きりのリボンを両手で握らされた彼女は、恥ずかしそうにずっと俯いている。

「それでは引いていただきましょう！ どうぞ！」

彼女は少しだけ間を取ると、やけくそ気味にリボンを引いた。

その途端。

新婦の持つ花束は白い煙で包まれ、中から十数羽の白ハトが飛び出した。

バサバサと、勢いよく会場を飛び回るハトハトハト。

頭に二匹もハトを乗せ、呆然と立ち尽くす司会者。

襲い掛かる羽音に怯え、席から転げ落ちる招待客たち。

錯綜する怒号に悲鳴。まさに阿鼻叫喚の図。

ただ、リボンを引いた当の本人だけは、あまりの出来事に噴き出してしまっていた。

まさかこれって……。

横からぼくの袖が引っ張られる。

「おい、ずらかるぞ大地」

「ちょ、ちょっと」

ぼくらは騒ぎと混乱に乗じて、足早に会場から抜け出した。

☆ ☆ ☆

「ねえ空太郎、あれはないだろー」

「何言ってるんだ。ざまあーみるだよ。お前も腹が立っただろ？」

「まあたしかに、彼女は気の毒だったけどさあ」

「あれじゃ晒しもんじゃねーか。なんだあの軽薄な司会者は。天誅だ天誅」

空太郎の鼻息はいつもにまして荒い。怒らせると手がつけられないのだ。

「それにしても、見事なハト出しだったね。本番でもあんなに上手く出来ないくせに」

「ばーか。俺はやれば出来るんだよやれば。いつもは本気出してないだけさ」

「いや、カッコ良かったよマジで。ぼくもマジック覚えようかなあ」

「フン。やめとけやめとけ。そんなの覚えなくても、お前は、あと八年も我慢すりゃあー」

空太郎は肩を丸め、ぷぷぷ。と笑いを堪えている。

「は？ 八年ってなんのことだよ」

「あのな。男は30まで童貞を守り切るとな、魔法使いになれるんだよ」

ぼくは完全に頭に血が上った。

「こら空太郎！ 待てっ、おい！」

空太郎は、やーいやーいとお尻を叩きながら、走り逃げてゆく。

間抜けなことに、何度も後ろを振り向いているものだから、買い物袋を持ったおばさんにぶつかりかけていた。

まったく、あれじゃヒーロー失格だろうに。

でも、まあ考えてみるとー

それも悪くないか。

ぼくは、数年後、魔法使いになった自分の姿を想像し、にまりと微笑んだ。